



—新たな学習指導要領が示す理念の共有に向けて—

2018. 3. 3 (SAT) アクション福岡

全国の体育科・保健体育科教育に関わる有志が、新学習指導要領への理解、体育学習や保健学習に関する授業力の向上、新学習指導要領への理解、体育学習や保健学習に関する授業力の向上、教育課程編成等体育科教育の充実に向けて話し合う機会とし、九州から全国へ実践ベースの情報を発信し、全国の体育・保健体育ネットワークを深めるという目的でスタートした研究会も2018で7年目を迎えました。今やこのネットワークも、九州・日本を飛び出し、台湾や韓国にまで広がり始めています。

3月3日(土)に、福岡県立スポーツ科学情報センター(アクション福岡)にて、7回目のファイナルラウンドを開き、過去最高の154名が参加していただきました。本当に、参加いただいた皆さん、開催に携わられたすべての方々に感謝いたします。

1 はじめに

桐蔭横浜大学教授 佐藤先生より、本ネットワーク研究会の変遷についてお話がありました。2011年、九州各県で8回のラウンド開催、研究会登録者320名からスタートし、2017年は全国各地で10回のラウンド、732名の参加があったこと、この7年間でラウンド開催は全国から台湾・韓国に広がり、グローバルな体育・保健体育教育に携わる有志の輪になってきています。

今年度の各ラウンドでは、単元の構造図や知識・態度、カリマネのワークショップを数多く取り入れ、新しく示された学習指導要領に、いち早く対応できるような内容にしました。また、今回のファイナルの前夜祭として台湾師範大学のチェン・ウェイ先生率いる学生との単元の構造図の国際セッションの開催してみました。台湾の大学生からも多くのポスターセッションに参加していただいております、この国際セッションも大いに盛り上がり、会の広がりとして感じさせられました。

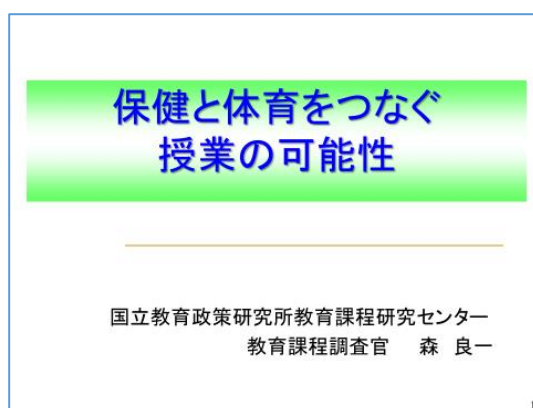


2 第1部「授業づくり最前線」学習指導要領に基づく指導の推進と実践

第1部の始めに、国立教育政策研究所 教育課程調査官の森 良一先生から「保健と体育をつなぐ授業の可能性」についてお話がありました。ここでは、新しい学習指導要領の盛り込まれた思いについて理解を深めることができました。小学校・中学校では技能や思考・判断・表現が新設されたこと、運動領域や体育分野との一層の関連を図った内容等の改善がなされたことについて、丁寧な解説がなされました。

運動と保健の関連では、ヘルスポモーションや健康増進の観点から、「全身を使った運動を日常的に行うこと」や「欲求やストレスへの適切な対処と体づくり運動との関連」など、生涯にわたって健康を保持増進し、健康な生活と運動やスポーツとの関わりを深く理解したり、心と体が密接につながっていくことを、子どもたちが実感できるようにさせていかなければならないことを改めて感じることができました。

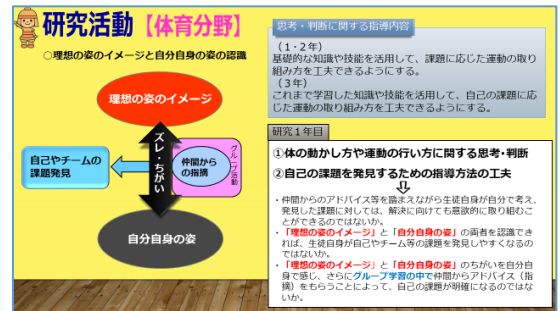
特に、保健の中核になる内容は、「小中高の発育発達」、「健康増進」、「疾病の予防と運動・スポーツの関連」の3つの視点をもつことの重要性を理解することができました。



次に、大阪府高槻市立第九中学校、福岡県立香椎高等学校、長崎県立五島高等学校の研究実践の発表がありました。第九中学校と香椎高校は国研の研究指定、五島高校は全国高校体育科・コース連絡協議会研究大会発表校でした。

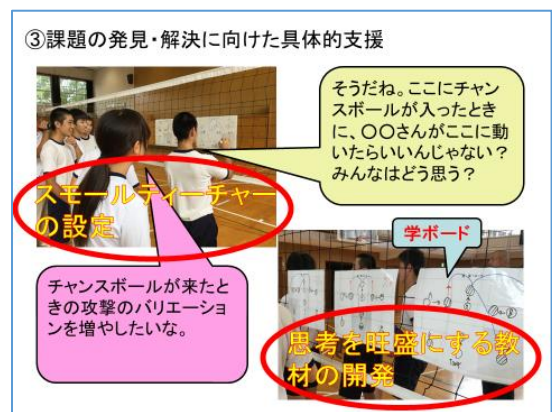
(1) 大阪府高槻市立第九中学校

自ら課題を見つけ解決する力の育成、習得した知識を活用した学習、学び合い学習の実践でした。国立教育政策研究所教育課程研究指定の研究1年目であり、きちんと年次での研究課題を立て、その課題解決のための授業改善・カリキュラムマネジメントなど研究方法にも工夫されていました。特に評価「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の観点での評価規準の作成と指導と評価時期の研究は先進的な取り組みでした。



(2) 福岡県立香椎高等学校

国研指定校の最終年度の発表でした。思考・判断・表現の向上を目指した研究であり、技能を高めるために必要な知識、思考・判断の基になる知識、態度の基になる知識等、知識の概念知、具体知、方法知の深まりと指導者がそのことをしっかりと生徒に伝えることが技能も思考・判断・表現も高まっていったという実践でした。「教材の開発や発問の工夫」「目的を明確にした教え合い活動」「スモールティーチャーの設定」等の課題の発見・解決に向けた支援を通じて、生徒の表現力に変容が見られたということでした。



(3) 長崎県立五島高等学校

五島高校でのスポーツコースの授業実践であり、高校生がスモールティーチャーとして小学生に運動を教えるなど離島ならではの活動がありました。「生涯を通してスポーツの振興発展に関わることができる資質や能力を育てる」というねらいや、自分の専門種目に特化しながら、「する、みる、支える、知る」などの多様なスポーツへの関わり方を経験させる学習活動であり、地域社会との連携・交流を通じた実践的・体験的な授業への取組は、体育科・スポーツコースならではの取り組みであり、指導の観点からも多くの内容を学ばせることができたそうです。

第52回全国高等学校体育学科・コース研究大会

○会場：長崎県立五島高等学校
 ○期日：平成29年11月16日～17日
 ○大会主題：「明るく豊かで活力ある生活を営む態度の育成を目指して」～地域（離島での取組）～
 ○参加者：全国高等学校体育学科・コース連絡協議会加盟校の各校代表者（全国加盟校数：118校）
 ○主な内容：
 ・授業発表（柔道・剣道・陸上）、研究協議
 ・記念講演 森岡統一郎（競歩、富士通）「選手と指導者のより良い関係」
 ・スポーツ庁講話 高橋修一 教育課程調査官「新しい学習指導要領の考え方」

2 第2部 ポスターセッション・ブース展示 教育・行政・研究の情報共有

全国の先生方、指導主事の先生方、台湾師範大学、鹿屋体育大学、福岡教育大学、東京国際大学、名古屋学院大学の大学生から、合計30本のポスター発表がありました。授業の工夫、小学校体育専科、カリキュラムマネジメント、健康教育、メタ認知能力など様々なジャンルの内容があり、参加者と熱く語り合っていました。

展示ブースには、剣道簡易竹刀、授業支援ツールの開発、JADAの



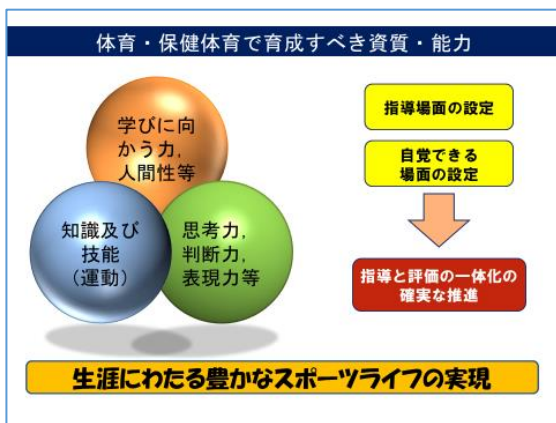
ポーツの価値教育情報コーナー、体づくり運動アプリタブレット体験、食パンを使った手洗い実験、九州体育・保健体育ネットワーク資料室の資料や各県の資料展示などがあり、たくさんの情報公開に皆さんも興味津々のようでした。



3 第3部「保健体育授業づくりシンポジウム」

～新たな学習指導要領で期待される授業づくり～

愛媛大学 日野克博先生、国立教育政策研究所 高橋修一先生・森良一先生をパネリスト、指定討論者の岩手大学 清水 将先生をお迎えし、佐藤先生のコーディネートでシンポジウムを行いました。



(1)「新しい学習指導要領の考え方」 国立教育政策研究所 高橋修一先生

新しい学習指導要領では、知識について、体の動かし方や用具の操作方法などの具体的な知識と、運動の実践や生涯スポーツにつながる概念や法則などの汎用的な知識で示されていること。これは、生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現に向けて、特定の運動種目等の具体的な知識を理解することが学習の最終的な目的ではなく、学習する運動種目等における具体的な知識と汎用的な知識との往還を図ったり、運動に関する領域と体育理論等との関連を図る中で、各領域の特性や魅力を理解したり、運動やスポーツの価値等を理解したりすることができるよう、知識に関する学習指導の更なる充実が求められるためであることをお話していただきました。

性や魅力を理解したり、運動やスポーツの価値等を理解したりすることができるよう、知識に関する学習指導の更なる充実が求められるためであることをお話していただきました。

(2)「新しい学習指導要領で期待される授業づくり」 愛媛大学 日野克博先生

テーマ：新たな学習指導要領で期待される
体育・保健体育の授業づくり

発表の内容



どのような
体育授業を目指すのか？



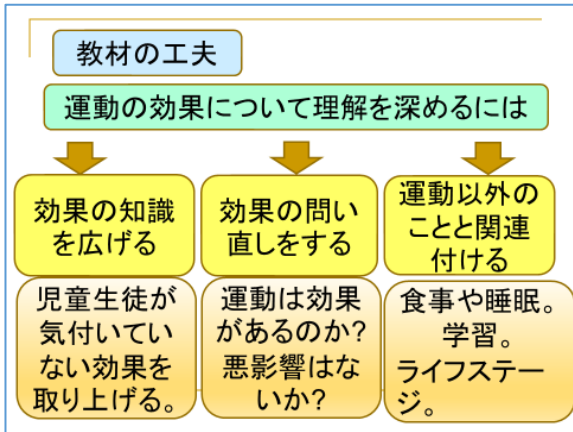
どのようにして
よい体育授業を実現するか？

実践事例の紹介

→ “やってみよう！”

実践例を交えたお話で、まずは愛顔(えがお)いっぱい授業を目指すこと。そのためには、指導内容を明確にすること、特別な準備はらず身近なものを使うこと、子ども一人一人が達成感を味わえることが必要であるということでした。より良い授業に向け「子どもにとって課題がやさしい授業・条件がやさしい授業・言葉がやさしい授業」を目指すものであり、体育授業の価値は「動ける身体づくり(身体性)・多様な関わり(関係性)・みんなで楽しむ(社会性)」を求めていきたいものであると熱く語っていただきました。

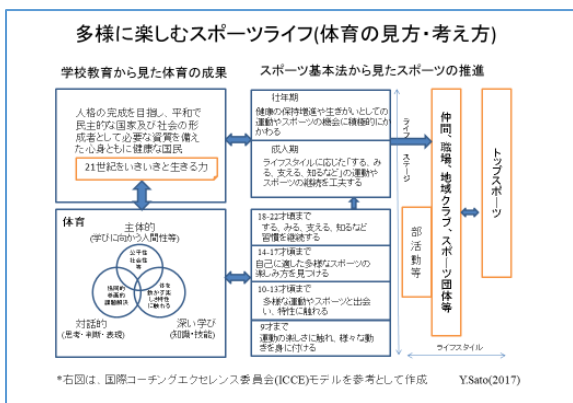
(3) 「保健と体育をつなぐ授業の可能性」 国立教育政策研究所 森 良一先生



どのように保健と体育を関連させていくのか、その重要性についてお話ししていただきました。新しい学習指導要領では、保健領域の「健康な生活と運動」及び「体の発育・発達と適切な運動」について学習したことを、運動領域の各領域において関係付けて学習することによって、児童が運動と健康が密接に関連していることに考えをもてるよう指導することを示しており、運動と健康との関連について具体的な考えをもてるよう配慮することが大切であること、このための授業の工夫が深い学びになるとお話になりました。

(4) まとめ

桐蔭横浜大学 佐藤 豊先生



新たな学習指導要領で期待される授業づくりとして必要とされるのは、1つ目として、知識についてが考えられます。これは、保健にもつながるものですが、「何のために行うのか」という概念知をしっかりと理解し、「何のためにあつて、それをどうやるのか」というものが教材の工夫であり方法知であります。そこから、「どのようなアドバイスをするのか」というコツのレベルの話が具体知になっていきます。この概念があつて具体や方法につながっていく必要があるのです。概念をしっかりと意識し、具体や方法をしっかりと行っていくことが重要でしょう。

2つ目に思考・判断・表現です。これからは、論理的思考力・判断力・表現力を求めつつ、即時の判断、瞬時の判断力を高めていく授業づくり、技能の学習が進みながら思考力が高まっていく授業づくりが求められるでしょう。

3つ目にスキルについてです。体育・保健体育において、果たして運動の技能だけをスキルと呼んでいいのかが重要になります。これからは、推進発展のスキル、コミュニケーションのスキル、実践の中で活かしていくスキルなどを、どう体育・保健体育として引き取り、考えていくのが課題になります。このような研究会の中で議論し、考えを整理し深めていく必要があるでしょう。

〇あとながき

今回のファイナルは、新しい学習指導要領が求める子どもたちの姿をしっかりと理解し、そのために「何ができるようにするか」「何を教えるか」「どのように学ぶか」にどう取り組んでいくのが明らかになりました。また、主体的・対話的で深い学びの実現、カリキュラムマネジメントなど時代が求めているものにどう対応していく明確になったように思います。体育と保健のより一層の関連で、運動・スポーツを通して、心も体も健康な子どもたちを育てていきたいと思ひます。まさしく、これが体育・保健体育の「見方・考え方」でしょう。

これからも、体育・保健体育を通した運動・スポーツの価値を高めていこうとする志をもった多くの方々との繋がりや広がり求めていきたいと思ひます。来年度も3月上旬に、アクション福岡でファイナルラウンドを開催します。ご参加していただきましたすべての皆様に感謝します。(ふくい ひろかず)

3月2日(金) 国際ワークショップセッション レポート

今回からの新たな取り組みとして、前日の金曜日からの国際ワークショップを開催しました。海外の学生が多く参加できるように、日本の学校訪問、交流セッション、ファイナルラウンドをセットとして参加することで、履修証明書を発行するようシステムを整えました。

① 小学校訪問 (篠栗町立勢戸小学校)

台湾訪問団を中心に、勢戸小学校を訪れました。当校は平成27～29年度福岡県重点課題(子供の体力向上に向けた効果的な取組)研究指定校で、本多先生が指導助言を担当されています。はじめに山本達也校長先生から学校紹介のプレゼンがあり、6年生の合唱で歓迎を受けた後、坂田祐也先生による6年生の跳び箱運動を見学させていただきました。児童相互の関わり合いを重視しながら、技をより大きく見せるための課題発見と、その解決のための練習の場を選択する授業。最後は、ある児童の着地が見事にピタッと決まり、大きな歓声が湧き起こりました。授業後のディスカッションでは、チンウェイ先生から「研究主題に関わる3つの特性(身体性、思考性、社会性)と実際の子供たちの様子がうまくリンクされていてとても勉強になった。」とコメントをいただきました。



② 国際交流 ; 単元構造図ワークショップ～台湾師範大学の教員・学生たちと単元構造図を作ろう～

アクション福岡に移動し国際版単元構造図ワークショップを実施しました。台湾師範大、福岡教育大、鹿屋体育大、桐蔭横浜大の学生・院生あわせて約40名のグループに、駆けつけて頂いた現職の先生方など8名がコーディネーターとして加わり、中学校1・2年生「バレーボール」を題材に単元構造図の作成に取り組みました。

はじめに佐藤豊先生(桐蔭横浜大)から、単元作成時の留意点や作業手順の説明があり、その後作業を開始しました。ディスカッションは使用する言葉の共通理解からスタートしました。例えば、技能「パス」、「pass」、「伝(傳)球」、「オーバーハンドパス」、「overhand-pass」、「頭上傳(伝)球」。ジェスチャーや英語や漢字やスマホを駆使しながら、少しずつディスカッションも白熱していき、三カ国語で表記したり、イラストで表したりという工夫を織り交ぜて何とか完成させることができました。

台湾の授業では、短い単元での実施が一般的なため、「ゴールイメージ」を共有することに苦労していましたが、指導内容(特に知識、態度、思考判断)と活動のイメージや指導過程など、学生間はもちろん、国を超えて多様な考え方があることを再確認することができ、単元構造図が世界を超えて人々をつなぐツールになることも実感できる時間となりました。



(文責: 木原)